

平成 22 年 5 月 25 日現在

研究種目：基盤研究 (C)  
 研究期間：2006～2009  
 課題番号：18520532  
 研究課題名（和文） 康熙朝後半における内陸アジア政策の多元性と側近政治に関する研究  
 研究課題名（英文） The diversity of Inner Asian policy and the politics by the Kangxi's aides in the late period of his reign.  
 研究代表者  
 楠木 賢道 (KUSUNOKI YOSHIMICHI)  
 筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・准教授  
 研究者番号：50234430

研究成果の概要（和文）：満文硃批奏摺と内閣蒙古堂档を分析し、康熙 40 年代の清朝の内陸アジア政策と側近政治について、以下の特徴を明らかにした。①康熙帝は、紫禁城で養育されたモンゴル人チベット仏教僧ジャンナン=ドルジを西寧に駐在させ、内陸アジアの情報を収集させた。モンゴル・チベットの有力者は彼を畏怖し、彼はその状況を利用してチベット状況を安定させようとした。②康熙帝は、蒙古旗人官僚を直接、青海・チベットに派遣し、情報を収集させるとともに、有力者と交渉させた。有力者も蒙古旗人官僚を交渉相手として信頼した。

研究成果の概要（英文）：Analyzing Palace Memorials and Archives of the Mongolian Office in the Grand Secretariat, I revealed the following feature on the Qing's Inner Asian policy and the politics by the Khan's aides during Kangxi 40s. First, Kangxi ordered Tibetan Buddhist monk, Šangnan Dorji, who was a Mongolian, and had grown in the Forbidden City, to station Xining and collect information on Inner Asian. Influential Mongolians and Tibetans feared him, and he tried to stabilize Tibet using this situation. Second, Kangxi sent officials of Mongolian Banner to Kōke Nayur and Tibet to collect information and to negotiate with influential Mongolians and Tibetans. Mongolians and Tibetans trusted officials of Mongolian Banner as negotiating partners.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,200,000	0	1,200,000
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,400,000	660,000	4,060,000

研究分野：東洋史、内陸アジア史

科研費の分科・細目：史学、東洋史

キーワード：ラサン=ハン 康熙帝 チベット仏教 ダライラマ シャンナン=ドルジ  
 パンチェンラマ ホンタイジ サンゲ=ギャムツォ

## 1. 研究開始当初の背景

私は、平成 14-17 年度科学研究費補助金基盤 (B) (2) 「清朝における満・蒙・漢の政治統合

と文化変容」を受け、1636 年ホンタイジ大皇帝即位の儀礼に象徴される満洲・モンゴル・漢の政治統合の理念が、現実にはどのよ

うな清朝の政策により遂行され、どの程度達成されたのか、そして各族の社会・文化が相互影響下において、どのように変容したのかを、満・蒙、満・漢の2つの組み合わせにより、具体的に検討してきた。その結果得た重要な結論の一つは、満・蒙を政治統合する理念、満・漢を政治統合する理念は存在するが、満・蒙・漢を統合するような理念・論理の類は存在しないということである。この間には注目すべき研究動向もあった。

すなわち、チベットを研究対象とし、清朝においては「多民族統合」の論理が形成されたとする平野聡『清帝国とチベット問題』(名古屋大学出版会、2004年)が出版され、これに対し、石濱裕美子氏が書評「平野聡著『清帝国とチベット問題』」(『東洋史研究』64-2, 2005年)で痛烈に批判したことである。議論の根幹にかかわる石濱氏の批判点は、①清朝はチベット仏教文化圏と中華文化圏をより高次に統合するような論理を持っていなかった、このような満洲版の大同思想を結論として導き出すのは、漢人を読者として想定した漢文史料のみを用いたからである、②清朝皇帝は相手に合わせて言語やコード大系の内容を自在にスイッチすることにより、他民族との円滑な交流を図ったのであり、対する民族のいかんによって自在にその姿を変える満洲王朝の多面性こそが、清王朝の本質である、以上の2点である。

私は、以上のような背景のなかで、対する民族のいかんによって清朝が自在にその姿を変えることができたのはなぜかという問題に対して、強い関心を持つに至った。

## 2. 研究の目的

本研究では、対する民族のいかんによって清朝が自在にその姿を変えることができたのはなぜかという問題に対して、康熙朝後半に展開された内陸アジア政策と側近政治に着目して検討するものである。具体的には以下の点を目的として研究を進めた。

(1) 康熙帝は、ジュン=ガル部のガルダンとの戦争に勝利するや、ガルダンがチベットに逃亡するのではないかと懸念するようになった。そこで、康熙帝は内モンゴル出身のモンゴル人チベット仏教僧ジャンナン=ドルジをジュンガリアから青海・チベットへの入り口にあたる西寧に駐させ、情報を収集させようとした。ジャンナン=ドルジは、1641年帰化城で生まれた後、紫禁城内で養育された。おそらくは幼い康熙帝の侍従幼童に選ばれ、康熙帝と生活・勉学をともにし、康熙帝の親政開始(1669年)以前から康熙帝の側近として仕えていたものと考えられる。以上の

ような経緯により、ジャンナン=ドルジは、帰化城生まれのモンゴル人としてモンゴル語を、チベット仏教僧としてチベット語を、そして幼少から康熙帝の側近として仕えて満洲語を習得していたであろう。このような言語能力と康熙帝の側近としての立場により、ジャンナン=ドルジは康熙帝の内陸アジア政策に重要な役割を果たしていくことになる。このジャンナン=ドルジの生涯と事跡を満文档案史料を含む各種史料に基づき、徹底的に復元する。そして、ダライ=ラマ6世の宗教的特権の放棄、ダライ=ラマ政庁の摂政サンゲ=ギャムツォによるホシュト部の首長でありチベット王であるラサン=ハン毒殺未遂事件、ラサン=ハンによるサンゲ=ギャムツォ殺害、ラサン=ハンによるダライ=ラマ6世の拘束と護送、ラサン=ハンによる新ダライ=ラマ6世擁立、青海ホシュト部首長層による新ダライ=ラマ6世の不承認など、康熙40年(1701-1710)代のチベット・青海では重大事件が連続して発生するが、これらをジャンナン=ドルジがどのように康熙帝に報告し、処理したかを、個別具体的に明らかにする。そしてその処理に、ジャンナン=ドルジがモンゴル人であること、チベット仏教僧であること、康熙帝の側近であることが、どのように影響したかを検討する。またジャンナン=ドルジが、ラサン=ハン、ツェワン=ラプタン、事実上の青海ホシュト部長ジャシ=バートル、サンゲ=ギャムツォ、ダライ=ラマ6世・パンチェン=ラマ2世らチベットの転生僧らから、どのような存在として認識されていたかを明らかにする。

(2) ジャンナン=ドルジと同じ頃に西寧に駐し、ラサン=ハン、ツェワン=ラプタン、ジャシ=バートル、サンゲ=ギャムツォ、ダライ=ラマ6世、パンチェン=ラマ2世らと交渉した清朝の官僚に、アーナンダとラシがいる。彼らは八旗蒙古出身の官僚であり、康熙帝の側近となった人物である。そこで満文档案史料を含む各種資料に基づきながら、アーナンダとラシの履歴と事跡を検討し、彼らが康熙帝の側近となった経緯を明らかにする。そして、清朝政権の中核構造そのものともいえる八旗に編入されたモンゴル人であること、モンゴル語学習とモンゴル人としてのアイデンティティを鼓舞して統治エリートとして養成されたことが、康熙40年代のチベット・青海で連続して発生する重大事件を彼らが処理する際、どのような影響を与えたかを分析する。

(3) (1)(2)で考察した内容から、ジャンナン=ドルジとアーナンダ・ラシが、ラサン=ハン・ツェワン=ラプタン・ジャシ=バートル・サンゲ=ギャムツォ・ダライ=ラマ6世・パンチェン=ラマ2世らと交渉した際の共通点・相違点を検討する。そして相違点をはら

みながらも、彼ら側近の存在と活動によって、内陸アジアに多角的な政策が遂行されていく様相を明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1) 中国第一歴史档案馆に所蔵される康熙朝満文硃批奏摺所収のシャンナン=ドルジによって記された満洲語の奏摺、合計 68 件の翻訳を完成させる。これに基づき、ダライ=ラマ 6 世の宗教的特権放棄、サンゲ=ギャムツォによるラサン=ハン毒殺未遂事件、ラサン=ハンによるサンゲ=ギャムツォ殺害事件の情報を、康熙帝はどのように理解していたかを解明する。

(2) 中国第一歴史档案馆所蔵の内閣蒙古堂稿のなかから、シャンナン=ドルジの奏摺に関連する内容を持つ、ラサン=ハン、ツェワン=ラブタン、サンゲ=ギャムツォ、ダライ=ラマ 6 世、パンチェン=ラマ 3 世、及びジャシーバートルら青海王公の表文を調査し、訳文を作成する。これに基づき(1)の作業を補完する。

(3) 当該時期の内陸アジア政策を含む清朝の統治政策について、江戸時代の知識人はどのようにして情報を得ていたか、また理解の到達点はどのようなものであったか検討し、本研究における私の視角を相対的に評価する。

(4) 康熙朝後半の側近政治の比較座標として、清朝入関前の天聰 8 年 (1634) の満文档案を精読し、当時の太宗ホンタイジのモンゴル政策・側近政治を明らかにする。

### 4. 研究成果

(1) 康熙朝満文硃批奏摺所収のシャンナン=ドルジ奏摺、合計 68 件の翻訳を完成させた。ラサン=ハンによるサンゲ=ギャムツォ殺害など、チベット・青海の重大事件を、シャンナン=ドルジを通じて、いち早く康熙帝が正確な情報を得ていたことを解明した。さらにシャンナン=ドルジがモンゴル語・チベット語に精通し、チベット仏教界と青海ホシュート部首長層の権力関係を熟知していたため、ダライ=ラマ・サンゲ=ギャムツォをはじめとするチベットの聖俗の有力者や、青海ホシュート部の首長層から非常に恐れられていたこと、シャンナン=ドルジは恐れられていることをうまく利用し、ダライ=ラマ 6 世が沙弥戒を返上し僧侶としての修行を放棄した後のチベット情勢の混迷を何とか安定させようとしたことを明らかにした。この点において、チベット・青海の聖俗の有力者から信頼されていたアーナンダ・ラシら蒙古旗人官僚とは異なる。またサンゲ=ギャムツォ殺害事件時に、北京からラサ・シガツェに蒙古旗人官僚ジェンリヤンを派遣し、康熙帝が直接情報をとっていたこと、さらにチベット・青

海と北京を往来する商人からも聞き取りをして、多角的に情報をとっていたことを解明した。

(2) 内閣蒙古堂稿所収のラサン=ハンらの表文について康熙 40-42 年部分を調査した。そして西北辺外の有力者たちの表文が、まず西寧のシャンナン=ドルジのもとに届くと、シャンナン=ドルジはいち早くその内容を奏摺に記し、概ね 2 週間で康熙帝に届け、他方、表文自体は題本と同様の送達方法で西寧から北京まで約 3 ヶ月をかけて送達されたことを突き止めた。

(3) 内陸アジア政策を含む清朝の統治政策について、江戸時代の知識人はどのようにして情報を得ていたか、また理解の到達点はどのようなものであったかを、18 世紀初頭の事例として、荻生北溪の著作を中心に考察した。その結果、荻生北溪が、①清朝が満洲族の皇帝をいただく征服王朝であり、伝統的な中華王朝とは異なり、権力が分散的状況にあった、②官僚制よりも側近に頼って統治をおこなっていた、と理解していたことを明らかにした。さらに 19 世紀初頭の事例として、志筑忠雄・馬場為八郎の著作を中心に考察した。その結果、清朝皇帝の王権がチベット仏教を介してモンゴル帝国大ハーンであり元朝皇帝であるフビライの王権を継承するものであり、清朝とロシアとが何とかプラグマティックにネルチンスク条約を締結できたのは、両国がモンゴル帝国の継承国家だったからであるという理解に、志筑が到達していたことを明らかにした。また志筑と馬場が、オランダ語文献の翻訳を通して、清朝がシナ（中国本土）とタルタリア（内陸アジア）からなら二重帝国であったこと、さらには、タルタリア部分の理解を深めるためには、チベット仏教に関する知識が必要であること、清朝の政治が科挙官僚だけではなく、多様な出自を持つ側近によって支えられていたと理解していたことを見いだした。

(4) 太宗ホンタイジが権力を行使するために、爵位制度を整備し、恩賞・処罰として爵位の昇降を積極的に行い、必ずしもホンタイジの権力に服しているわけではない宗室の王公や有力氏族を牽制し、側近集団を形成していったことを明らかにした。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

① 楠木賢道 「『二国会盟録』からみた志筑忠雄・安部龍平の清朝・北アジア理解——江戸時代知識人の New Qing History?——」『社会文化史学』第 52 号、査読有、2009 年、1-30 頁。

- ②楠木賢道「江戸時代知識人が理解した清朝」『別冊 環 清朝とは何か』第16号. 査読有, 2009年, 240-253頁.
- ③楠木賢道「編入清朝八旗的扎嚕特部蒙古族」『中国辺疆民族研究』第2輯, 査読無, 2009年, 360-366頁.
- ④楠木賢道「天聰八年遠征察哈爾部與滿洲国 (Manju Gurun)的結構」『故宫學術季刊』第23卷第4期, 査読有, 2006年, 63-74頁.

[学会発表] (計2件)

- ①楠木賢道「清朝皇帝ホンタイジの岳母アンバ=ママの逆縁婚」, 日本アルタイ学会 第46回大会, 2009年7月18日, 長野県信濃町藤屋旅館.
- ②楠木賢道「『二国会盟録』からみた志筑忠雄・安部龍平の清朝・北アジア理解——江戸時代知識人の The New Qing History ? ——」, 社会文化史学会 第44回大会, 2008年8月2日, 筑波大学茗荷谷キャンパス.

[図書] (計5件)

- ①常木晃, 楠木賢道他『食文化——歴史と民族の饗宴』, 悠書館, 2010年, 253(123-146)頁
- ②楠木賢道『清初対モンゴル政策史の研究』, 汲古書院, 2009年, 336頁.
- ③楠木賢道・加藤直人・中見立夫・細谷良夫・松村潤『内国史院檔 天聰八年 本文』『内国史院檔 天聰八年 索引・図版』, 財団法人東洋文庫. 2009年, 709頁.
- ④細谷良夫, 楠木賢道他『清朝史研究の新たな地平』, 山川出版社, 2008年, 359(163-187)頁.
- ⑤邢永福, 楠木賢道他『明清档案与歴史研究論文集』上・下, 新華出版社, 2008年, 1568(1090-1098)頁.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

楠木 賢道 (KUSUNOKI YOSHIMICHI)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授

研究者番号: 50234430